

学校点描

1年生も加わって部活動等の放課後の生徒たちの活動はいよいよ本格化してきました。

《S中学校》

NO.4 H30. 5. 15

担当：教頭

10日の18：00より田んぼの先生である地域にお住まいのI・Kさんと打ち合わせをしました。今年度も、本校の敷地内に手作りで作った田に、3学年の技術科と総合的な学習の時間を使って稲づくりを行うためです。Iさんとは初対面でしたが、「今年は教頭先生のために、いつも以上に本気になって稲の管理をして収穫量を増やしたい。」と語ってくれました。

Iさんとの打ち合わせが終わると、合唱団キャッスルサイドの団長さんであるO・Aさんが職員室を訪れてくれました。毎週木曜日に本校の音楽室を借りて練習をしています。団長さんからいただいたキャッスルサイドの会則には、“S中学校の行事に積極的に参加すること” S中学校生徒の活動を支援すること“が明記されています。毎月のあいさつ運動にも団員の方々が意欲的に参加してくれている理由がわかりました。団員の中のお一人、M・Cさんは、お忙しい中にもかかわらず本校のHPを制作してくれています。団長さんは、市民文化会館の事業で年末に山形交響楽団の演奏で第九を合唱する企画にも参加する話をしてくれました。職員室にいた音楽教師の柴田先生に、「Frede! 一緒に歌いましょう」と熱心に参加を呼び掛けています。

サイレントマジョリテイ

10日の午後からは、愛修会（生徒会）総会が肌寒い体育館で行われました。生徒会役員からいただいた資料の冊子をみると最後のページにはきちんと愛修会会則も掲載されています。第1節 第7条には、“この会は最高議決機関で、年一回定期に開く”なんて書いてあります。議長に選出されたU・DさんとH・Aさんが出席人数を各学級委員に確認させています。「この会には214名の生徒が参加していますので、会則に基づき協議して決定した事項はすべて有効となります。」なかなか使わない議会用語を使いながら総会が始まりました。

さっそく会長のS・Kさんが提案した、“各クラスで週目標を設定して毎週それを実行していく”という案に質問が出ています。2年A組からは「月ごとの目標の方が実行しやすいのでは？」と質問がありました。会長は、「毎週がんばる気持ちを新たにしたい」とそれに答えます。ここで「わかりました」と終わるのが普通の中学生。2Aの思いを受けて質問者に立っているT・Mさんは「コロコロ目標が変わるのは、実行性として難しいのでは？」と追質問を加えました。会長はすこし間をおいて「いや、ちょっとずつ変わることの取り組みやすさもあるのではないかと返答しています。

当然、全部が全部このようなやりとりではないわけですが、T・Mさんのように、自分の学級の考えを受け止めてほしいという気持ちは、粘り強い質疑となって議論を盛り上げていました。

♪どこかの国の大統領が言っていた 声を上げない者たちは賛成していると・・・

選べることが大事なんだ 人に任せるな 行動しなければ NOと伝わらない

『サイレントマジョリテイ』 樺坂 46

総会でのT・Mさんの質疑を聞きながら、なんとなくこの歌を思い浮かべました。

昨年、中央研修に行ったとき、ある講義の中で講師が話していたんです。

「昭和 61 年で 18 歳未満の子どものいる家庭は 46% でした。それが平成 26 年になると 22% です。今の学校の周りには、子育てが一段落したりして学校との関係が切れている世帯が、今や 8 割いるんですよ。わたしは、それをサイレントマジョリティと呼んでいます。学校はもっと学校と関係が切れている地域人のことを意識しなくてはならない時代です。」

確かに、最近の学校にくる要求には、厳しいご叱責のものや、対応が難しいものもあります。ただ、どのケースも学校に期待している表れなんだと、われわれ学校関係者は肝に銘じる必要があります。学校は、敷居が高いと言われます。この高い敷居を乗り越えてでも話したいことがあるのだと、学校はもっと謙虚に話を聞かなければなりません。でなければ、多くの沈黙の声に耳を傾けることができないからです。

田んぼの先生の I さんは、ご自分が中学校でお世話になった担任の先生に逢うためにわざわざ四国まで家族旅行をしたことを、初対面のわたしに語ってくれました。中学、高校と駅伝で活躍した I さんのお子さんは今は大学生だそうです。

キャッスルサイドの O 団長さんは、いつも学校の施設を借用して活動をさせてもらっているからと、協力できることは遠慮なく言ってほしいと、初対面のわたしに要望を聞いてくれます。

一通り協議がおわっても総会は終わりません。会長の S・K さんが今度は「学校で正しい言葉遣いを広めるためにはどのような取り組みをしていけばよいのか考えてみたいと思います。」と全校生徒に投げかけました。議長が指名して生徒ひとり一人に聞いていきます。



N・M さんは、「個人が意識するというのはいいいんだけど、それは無理なので、お互いが注意し合うことだと思います。」と答えました。

N・R さんは「先生も含めて、上の人、上の学年が良い言葉を使うことだと思います。」と。

生徒の沈黙の声に耳を傾ける謙虚さがあれば、ちらりと生徒の心の声を垣間見ることができそうです。

きりとりせん

ご意見・ご感想をお願いします。